

繰り返さないために、紡ぐ言葉。  
ーハンセン病問題を考えるー

最初の夜、ふさぎ込んでいた私に、あるおばあさんが「リングを食べなさい」と手を伸ばしてくれました。でも、その手には指がなく、お札を言おうと見上げた顔の形相に驚き、私は「うわあ」と大声を上げて布団にくるまってしまいました。あの時の申し訳ない、取り返しのないことをしたという気持ちは、

初めて受けた差別と  
自らが犯した差別

「旅行に行くぞ」という両親の言葉を信じて、長崎から鹿児島へ向かったのが昭和35年、私が12歳の時でした。船の客室は空いているのに、なぜか私たちは機関室の横に立たされていました。今思えば、差別はそこから始まっていたんだと思います。

私にもかかわらずハンセン病の患者に  
対して、差別をしてしまった一人  
です。差別を完全になくすことは、  
困難なことかもしれません。それ  
は無知であり、他人事だからゆえ  
に起こることだからです。ハンセ  
ン病問題は過去のことだと考える  
人は多いですが、現在でも見知ら

## すべての世代に 必要な教育

77歳になった今でもはつきりと胸に残り、またその時の様子は眼にしつかりと焼き付いています。

翌日、帰ろうとした私は大人たちに羽交い絞めにされ、「ここで治療をするんだ」と言われました。抵抗できず、その時初めて自分が病気で、ここに隔離されたのだと悟りました。

# 今を生きる私たちが ハンセン病から学ぶべきこと



山口 文夫 さん (77 歳)  
昭和 24 年長崎県長崎市生まれ。第 20・22 代星塚敬愛園入所者自治会会長として、ハンセン病問題の啓発活動を積極的に行う。



山元 隆文 さん  
第 11 代星塚敬愛園園長。副園長を経て、平成 31 年 4 月に就任。現役の医師として消化器内科を専門とする。

入所者の方々は、これまで様々な偏見や差別を受け、想像を絶する苦難を経験されてきました。現在は、ハンセン病の後遺症に加え、高齢化に伴う疾患を抱えながら日々の生活を送っています。

このような中、私たち星塚敬愛園の職員は入所者の方々に寄り添い「敬愛園で過ごしてよかった」、「あなたに会えて良かった」と思ってもらえるよう、全人的な視点で医療や看護、介護、福祉の各分野で一丸となって業務に励んでいます。

また、社会交流館や歴史的建造物の見学などを通して、啓発活動にも取り組んでいます。鹿児島

県や宮崎県が主催する療養所訪問事業をはじめ、年間を通して多くの学生や一般の方々が当園を訪れています。こうした活動を通して、ハンセン病問題の歴史をさらに多くの方に伝えたいと考えています。

入所者の方々の願いは、同じ過ちを繰り返さないということです。しかしながら、コロナ禍においても患者さんやそのご家族に対しての偏見や誹謗中傷が大きな問題となりました。まだまだ偏見・差別は私たちの身近にも存在しています。

これからも多くの方に来園いただき、偏見や差別のない社会の実現に向けて一緒に取り組んでいきたいと考えています。皆様のご来園を心よりお待ちしております。



7 月 28 日に行われた、親子を対象とした星塚敬愛園訪問事業で、参加者が入所者と交流を行っている様子。

ぬ人に差別的な言葉を投げかけられたことがあります。これは、かつての私と同じように「知らない」ことが原因だと思っています。

だからこそ、全ての世代が問題意識を持ち、学び続けることが大切ではないでしょうか。自治会長として、また語り部として、ハンセン病問題を周知することにこれからも尽力していきます。

すべての世代が過去の歴史を知り、「他人事ではなく自分事」として考えてくれば、同じ過ちは繰り返されないと私は信じています。



ハンセン病問題講演会



星塚敬愛園創立 90 周年記念式典



療養所訪問事業



ハンセン病啓発パネル展



星塚敬愛園入所者自治会 80 周年記念花火大会



ハンセン病市民学会第 17 回総会・交流集会 in 鹿屋